

開始条件：なし

目的：敵の全滅

序幕：

ささやきが部屋に蔓延した。評議員たちは、衝撃のあまり混乱のまま互いを見やっている。

「いったい——何が？」議長は、信じられない面持ちで言った。「今日議席を失うのは、おまえさんひとりだよ、ジェリック。衛兵隊長、その議員を、即刻拘束しなさい」

衛兵隊長はニヤリと微笑んだ。ジェリックは議長の席に近づいた。

「まさか私に味方がいないとでも？」ジェリックは嘲笑った。「この政府に浸透するのは、シン＝ラが何年かけたと思っているのです？ 怠惰で鼻も鈍いあなたの元でね。今では評議員のほとんどは、既にシン＝ラの意志に屈しているかゆがめられている」

ジェリックは誰も気づかぬうちに、証拠品の短刀をテーブルから取り、引き抜いていた。それを議長に突き立てるのかと思いきや、自身の手首を切った。傷口からは濃い黒煙が立ち昇り、たちまちのうちにジェリックを包みこんだ。

絹を引き裂くような恐るべき悲鳴が、部屋じゅうを満たした。評議員たちは痛みのあまり膝を着いた。黒煙のなかから、翼と鉤爪をはやした、巨大な悪夢のような巨人が姿を現した。そして議長を指さし、吠え猛った。

「汝こそが最初に帰順すべき輩！」刹那、その怪物は飛行して近接し、議長を引っ掴んで、後ろの壁に叩きつけ、めりこませた。

衛兵隊長が、傍らで乾いた笑い声を響かせている。おかげで呆然自失の状態から正気に戻ることができた。まぎれもない、これは現実だ。素早く対処しなくては、狂信者どもは全てを灰燼に帰すだろう。

特別ルール：

キャラクター4人なら、行動順位が一番遅かったキャラクターは、前の3人の行動が終わった後で、空いた開始位置にコマを配置して行動を始めてください。

①の各ヘクスに、番号があるシナリオ補助トークンを、ランダムに1枚ずつ裏のまま配置し、さらにそれぞれに2ダメージ分のトークンを載せます。これらは評議員で、各HPは4+(2xL)。6-C名の評議員が倒れたら、パーティはこのシナリオに敗北します。評議員はパーティの仲間で、全てのモンスターの



使用する
地形タイトル：

B2b
11a
12b



敵です。手番では何もせず、モンスターの狙いに関しては行動順位「99」とみなしてください。治癒の能力を使われるか倒された評議員は、トークンを表に返して番号を公開します。それが①～③なら、①を読み上げてください。

衛兵隊長と《有翼の悪鬼》は、同じボスの能力カードを共有し、互いのデータシートを参照しますが、衛兵隊長のほうが先に行動します（それぞれの特殊アクションに関しては、下記参照のこと）。各ラウンド終了時、《有翼の悪鬼》には「治癒 8」が実行されます。

ボスの特殊アクション1：

衛兵隊長は「治癒 2、自身&全仲間」を実行します。

《有翼の悪鬼》が攻撃をした後、マップ上の全卵を除去し、同じ各ヘクスに通常の黑夜の魔神を発生させます。

ボスの特殊アクション2：

衛兵隊長自身が攻撃した後、このラウンド、その全仲間（《有翼の悪鬼》含む）の攻撃に+2。

《有翼の悪鬼》が移動と攻撃をした後、キャラクターと同数の卵を召喚します。各卵のHPは2+(L/2)（端数切上）で、召喚獣の狙いに関しては行動順位99とみなします。

1

特別ルール:

その評議員の周囲に魔的な力が渦巻き、幻の仮面が取り払われ、シン=ラの黒きローブとなった。シンジケートが、さらなるメンバーを評議員の幹部として送りこんでいたことが、今や明白となった。戦いは、より熾烈を極めることが約束された。

そのトークンを除去し、同じヘクスに無傷のカルト信者を発生させます（パーティの敵で、他のモンスターの仲間です）。キャラクター2名なら通常の、3名なら①～②の評議員だけが上級の、4名なら全員上級のカルト信者です。③～④なら、それは正しく評議員なのでそのままにして、先を続けてください。

どのカルト信者も、生ける骸骨を召喚する際、そうせず代わりに黑夜の魔神（通常）を召喚します。

倒れたことによって正体が公開された①～④の評議員は（実際にはシン=ラのカルト信者であったため）、シナリオの敗北条件である評議員には数えません。また、発生したカルト信者の数だけ、敗北条件における評議員の死亡数を1増やします。たとえば最初にカルト信者が発生した際、7-0名の評議員が倒れたら、パーティはこのシナリオに敗北するようになります。

以降ラウンド終了時、《有翼の悪鬼》への治癒は8ではなく8-(2xH)となります。Hは発覚したカルト信者の数です（それが生きていようが倒れていようが）。

終幕:

床に崩れ落ちたジェリックの肉体は、今やおおよそ人間の姿にまで戻っていた。だが変身によってその本質は既に崩壊しており、傷が治る気配はない。

「我らの手段を、さぞ悪辣なものだと思っておるだろうな。だがこれはこの街に対する、我らなりの最善なのだ……」ジェリックはつぶやいた。「こやつら商人どもには、市民の幸福などどうでもよく、私腹を肥やすことしか考えられぬ。貧者より搾取し、〈大樽〉の伝統を冒瀆し、みずからの名声を高めることしか考えられぬ。

だから我は……」ジェリックは沈黙し、瞑目した。落命したのだと思ったが、一瞬の後、断末魔の台詞を吐き出した。「この馬鹿どもはしょせん定命だが、シン=ラは永遠なり。我らは偉大なる刻が来るその時まで休むことなどない……」

「盗人たけだけしいにもほどがあるわ」ヴァルラスの女議員リュレサーが、ジェリックを踏みつけた。「この手の怪物としては、ふさわしい最期ね。私たちのお膝元で、こいつがこんな混乱を引き起こすことができたことについて、一考の余地があるわね。もうこんなことは起こさせない。約束する。

この計略を阻止し、私たちが悲惨な運命から救い出してくれたことに対して、どう感謝の言葉を尽くしても足りないわ。この尋常ならざる努力に対しては十二分に報われるべきだし、あらゆる嫌疑は取り下げられることになる」

こうして曲がりくねった苦難の道を抜けた先で、諸君は真の褒賞を得たのであった。新たな衛兵隊長が必要ということで、その地位を提示されたが、実に退屈そうなお役目だった。丁重にお断りし、新たな冒険の旅に出ることにする。

カーजनが待つ南の砂漠を訪ねるのもいいし、北方の氷結の原野に向かうのもいいだろう。そういえば、グルームヘイヴンでも面白そうな事件が起きているとも聞く。道は諸君の前に大きく開かれているのだから。

〈首都の陰謀〉 完